

2月上旬

冬の間のイチゴの管理

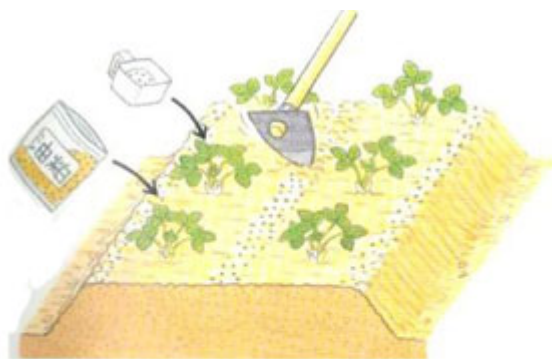
10月中旬から11月上旬に植えたイチゴは、この時期、本格的な寒さにあい休眠状態に入っています。この間、土があまり乾きすぎようなら、たまに灌水します。

また、土が軽くて霜柱がひどく、株が浮き上がるようなら、株間によく砕いた堆肥をうすく敷くのもよいことです。

苗が活着し始めた頃から、寒さに強いハコベなどの雑草が出てきていますので、除草を兼ねて中耕を1～2回行います。

追肥は、2月上旬に化成肥料30～40g/m²を畝の肩に施し、土をかぶせます。

2～3月に黒色マルチをすると、雑草を抑え、果実への土の跳ね上りを防ぐとともに、地温が上昇して生育が進み、開花も早まります。



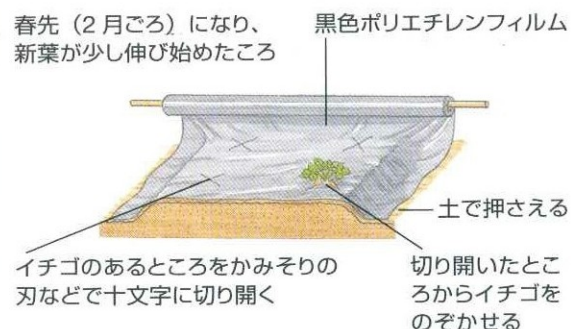
第1回

活着して盛んに生育し始めた11月上～中旬に株元から10～15cm離れたところに施し、軽く土に混ぜる。根は肥やけを起こしやすいので注意します。

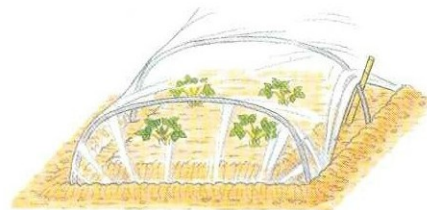
葉に斑点がついたり、葉裏にダニがつき、なんとなく勢いが悪くなったときは薬剤を散布して防ぐ



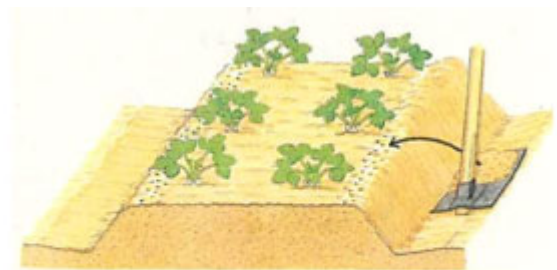
春先(2月ごろ)になり、新葉が少し伸び始めたころ



切り開いたところからイチゴをのぞかせる



トンネルは2月上旬ごろにかけ始める。半月くらいは密閉し、イチゴが伸びだしたら側方の裾を少し開けて換気する。夜間は閉める



第2回

冬越しした2月上～中旬(マルチの前)、畝の肩の部分に肥料をばらまき、通路の土をかぶせる

2月中旬

トンネルで3種の野菜を同居栽培

年が明けて一番早く種まきでき、春の野菜の端境期に新鮮な青菜を楽しむことができるのは、プラスチックフィルムによるトンネル栽培です。

おすすめの野菜は、ハウレンソウ、コマツナ、コカブで、その3種類を、ひとつのトンネル内に同居させて栽培することができます。

2月中・下旬頃、幅120cm、長さは任意のまき床に、完熟堆肥、化成肥料、油粕等をばらまき、15cmぐらいの深さによく耕し、鍬幅のまき溝を3列作ります。

真ん中の列にハウレンソウ、両側に他の2種をまき、覆土、灌水、細かな完熟堆肥を施した後、トンネルを覆い、四隅にきちんと土をかけ、完全に密封しておきます。

乾きがひどいようなら週1回くらい灌水し、コカブが本葉1枚になった頃から、トンネルの裾を開けて換気します。

また、やや栽培しにくい、ニンジンを真ん中にまき、ハウレンソウやコカブ、チンゲンサイなどを両側にまくこともできます。

生長の遅いニンジンが伸び始めた頃に追肥をします。

収穫はハウレンソウ、コマツナ、コカブからで、4月中旬～5月中旬にかけて行うことができます。



ハウレンソウ

ニンジン

コカブ

(はじめての野菜づくり12ヵ月 板木利隆著より)

2月下旬

家庭菜園の入門野菜「春ジャガイモの植え付け」

ジャガイモは、南アメリカが原産で、生育適温は15～20℃と冷涼な気候を好み、昼夜の温度差があるとよく育ちます。栽培は、2月下旬～3月中旬頃に植え付ける春植えと8月頃に植え付ける秋植えがあります。

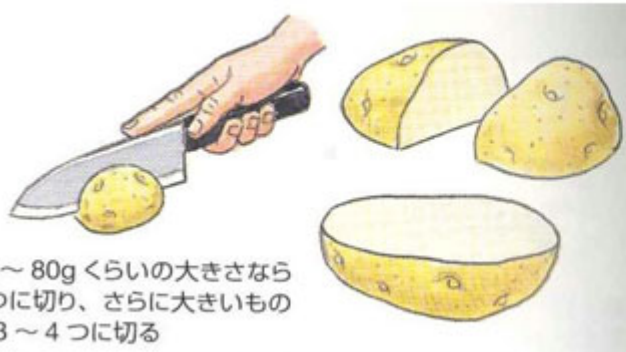
植え付け後約90日程度で収穫でき、土壌も選ばず栽培しやすいため、家庭菜園にぴったりです。

種イモは種苗店などで必ず無病のイモを購入することがポイントです。また、ジャガイモは休眠性があるので、植え付け期に休眠が明け、適度に芽の伸びたもの、よく充実したものを入手します。

種イモは、1片が30～40g程度になるように切ります。その際、それぞれ2～4個程度の芽を残して切ります。切った種イモは2～3日、日に当てて緑化、切り口を乾燥させると早く芽が出ます。

植え付けは、幅120cmの畝であれば2条に、60～70cmの畝であれば1条で植え付けます。種イモは必ず切り口を下にして植えます。

種芋の準備



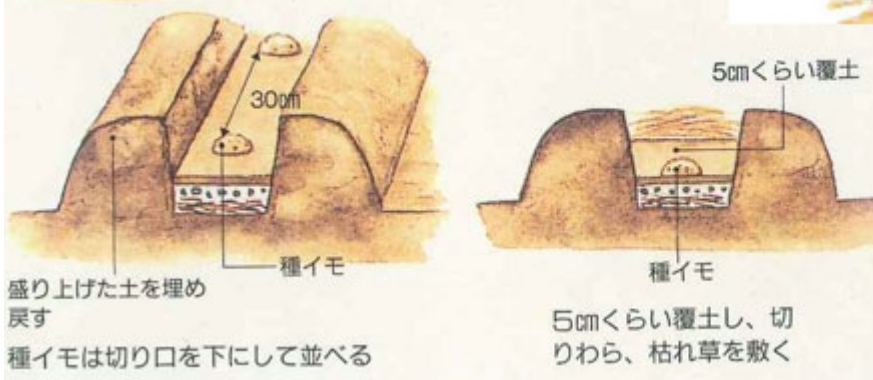
70～80gくらいの大きさなら2つに切り、さらに大きいものは3～4つに切る

畑の準備

秋から冬にかけてよく耕しておく。石灰は施さないほうがよい（イモに発生するそうか病はアルカリ性で発生しやすい）



植えつけ



盛り上げた土を埋め戻す

種イモは切り口を下にして並べる

5cmくらい覆土

種イモ

5cmくらい覆土し、切りわら、枯れ草を敷く